

図16-21 キセノマの抹塗標本（メチルアルコール固定，ギムザ染色）にみられる G. plecoglossi の生活史の各段階。

図16 人為感染後34日目のキセノマの塗抹標本。シゾゴニーおよびスポロゴニーのいろいろなステージが認められる。スケール20 μ 。(a) 一核のシゾント。(b) 2核のシゾント。(b') 円柱状のシゾント。(c)(c')(d)(d') 多核のシゾント（プラスモディウム）。(e) 変形したプラスモディウム。(f) 断裂したプラスモディウム。(g) スポロント，(h) 分裂した核が両端に移動したスポロント。(i) 2分裂によるスポロプラストの形成。(j)(k)(l) スポロプラストから胞子の形成。

図17 初期の円柱状シゾント (b) の分裂により生じた一核のシゾント (a)。これがシゾゴニー（増員生殖）である。スケールは5 μ 。

図18 最終段階のシゾントの分裂 (e) によりスポロントが生じる。(j) は染色性の落ちた胞子形成の一段階。スケールは5 μ 。

図19 スポロントの二分裂によるスポロプラスト形成 (i)。(k) は，胞子先端部にPAS陽性の部位（極糸の基部と考えられている）を有する胞子。

図20 スポロゴニー（胞子形成）が行われているスポロゴニー胞（矢印）。その表面に膜構造は認められない。スケールは10 μ 。

図21 G. plecoglossi の生活史の模式図。

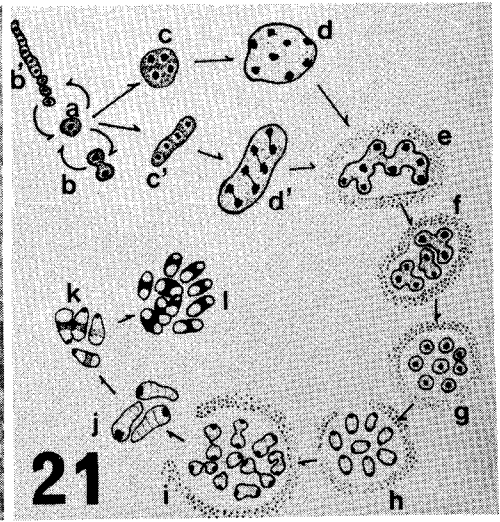
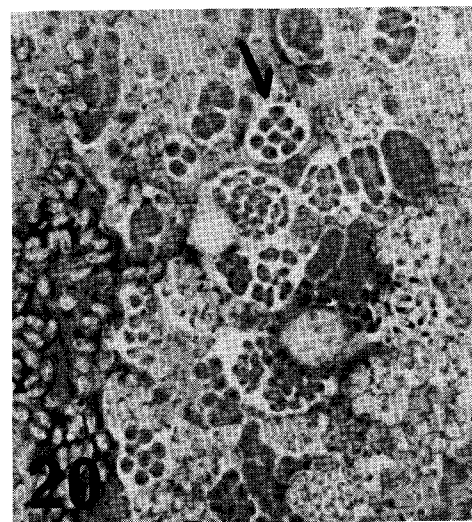
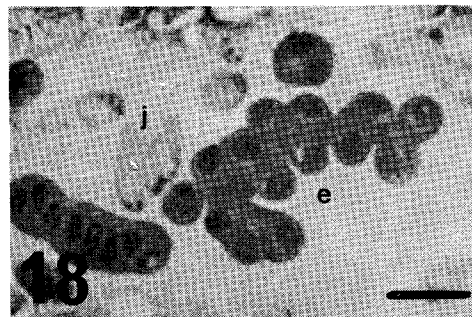
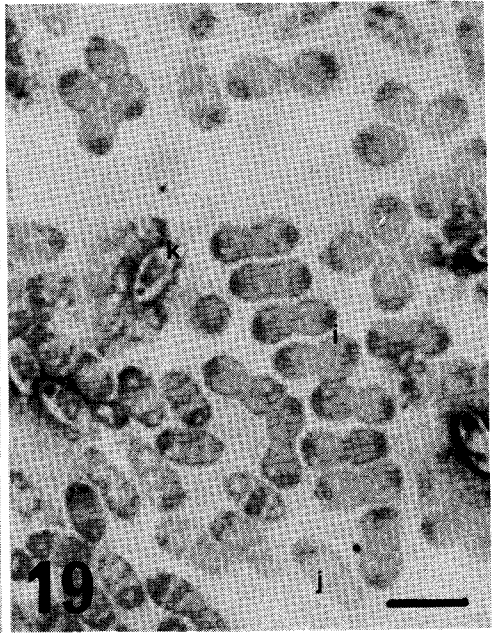
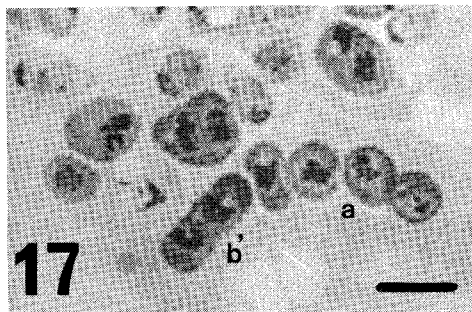
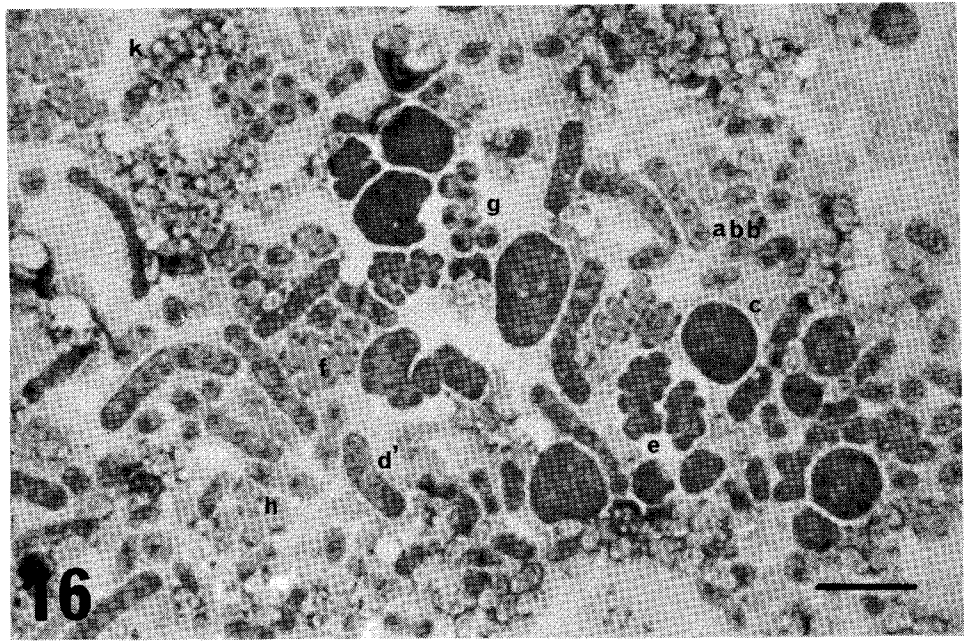


図22-25 G. plecoglossi の人為感染実験 (I)。

- 図22 経口感染による“シスト”形成状態。孢子懸濁液 (“シスト”を蒸留水中で崩壊させて作成) をしみこませたクランプルを投与された魚。幽門垂付近の脂肪組織と腹膜に“シスト”が形成されるのが特徴的である。
- 図23 浸漬感染による“シスト”形成状態。孢子浮遊液に17時間、浸漬させた魚。皮下に外観的に容易に認められる“シスト”が形成されるのが特徴的である。
- 図24 10%蔗糖水に懸濁させた孢子の皮下接種によるシスト形成状態。“シスト”塊は接種点付近にのみ形成されている。接種後34日目。
- 図25 蒸留水に懸濁させた孢子を皮下に接種した魚にみられた“シスト”塊形成による接種点の隆起。

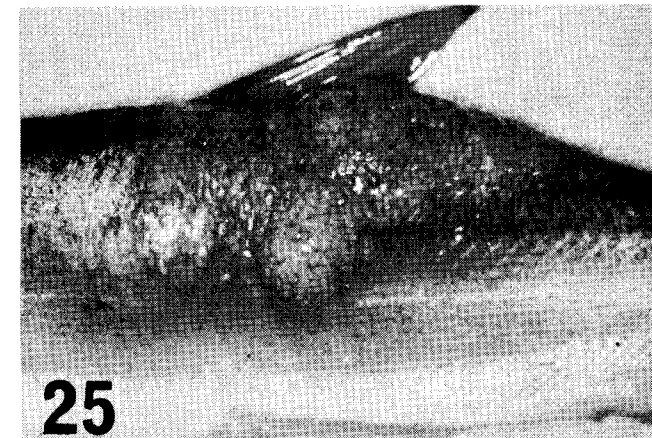
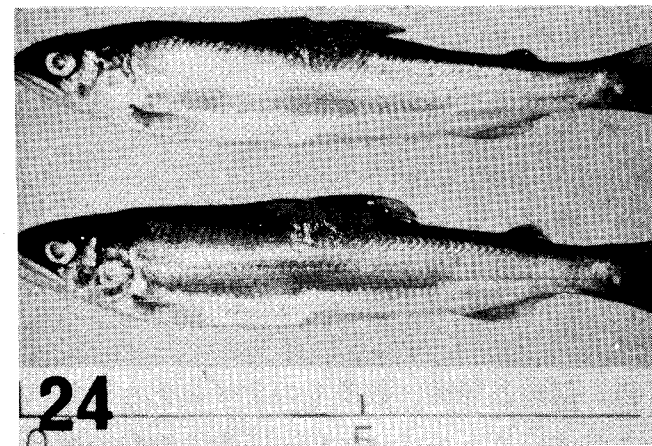
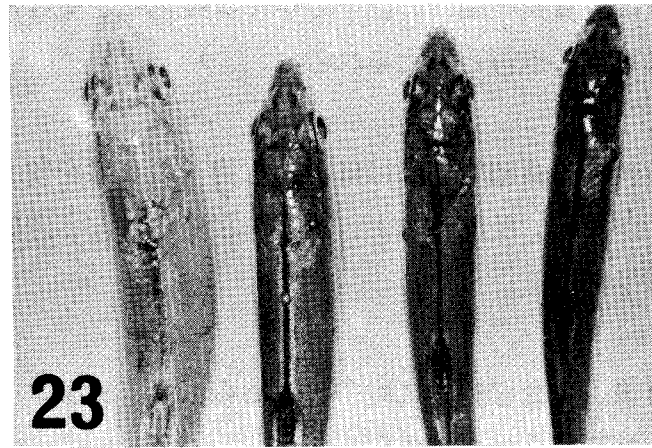
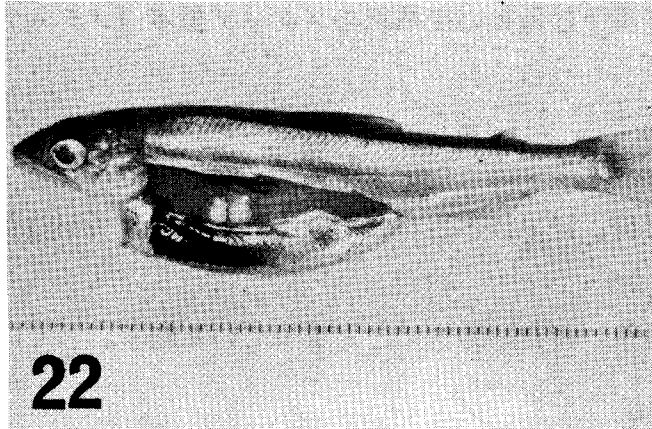


図26-35 胞子皮下接種後の接種点のスタンプ標本（メチルアルコール固定，ギムザ染色）。

図26 接種1日後。好中球と思われる細胞に4個の胞子が貪食されている。

図27 接種12日後。貪食細胞内にとどまっている胞子。とくに変化は認められない。

図28 接種3日後。貪食細胞内の胞子の中には染色性を失ったものがあるが，食作用による死への過程と考えられる。

図29 接種4日後。貪食細胞内にはほとんど胞子の形態を留めず，消失寸前とみられるものがある。反面，なお，ほとんど変化なく，感染能を維持するかもしれない胞子もある。

図30 接種5日後。貪食細胞内に胞子は認められず，シズントおよびその核と思われるものが認められる（矢印）。

図31 接種5日後，数個のシズントと思われる細胞を含んだ貪食細胞。

図32 接種7日後。数多くのシズントと思われる細胞を含んだ貪食細胞。よって，この細胞をキセノマと考えることが出来る。

図33 接種7日後。前図と同様，数多くのシズントと思われる細胞を含んだ貪食細胞。濃染されているものは（矢印），宿主細胞の核と思われる。

図34 接種7日後。無数のシズントと宿主細胞の核と考えられるものを含む細胞（キセノマ）。このような細胞は，この時期以後にも認められるが，その数は多くない。

図35 接種2日後。貪食されずに自由に存在する胞子。このような胞子は，接種後の早い時期ほど多く認められるが，接種5日後のスタンプ標本内にも数は少ないが，なお，認められた。

☒26-35

